

ワールドワイド携帯電話四半期動向

2006年5月1日報告

2006年1Q(1-3月)調査結果 目次

1	2006年1Q(2006年1-3月)結果の要約	3	8.2.1	アジア	25
2	地域別累積加入推移(四半期別)	7	8.2.2	欧州	25
2.1.	BRICs(中国 インド ロシア ブラジル)加入推移	10	8.2.3	北米	26
3	方式別加入推移(四半期別)	12	8.2.4	中南米	26
4	2006年加入者予測	15	8.3.	2006年メーカー別需要量予測	29
4.1.	地域別	15	9	Nokiaの2006年1Q動向	31
4.2.	方式別	16	10	Motorolaの2006年1Q動向	34
5	主要オペレーター加入者数推移	17	11	Sony Ericssonの2006年1Q動向	37
6	地域別オペレーター最新動向	21	12	Benqの2006年1Q動向	39
6.1.	アジア	21	13	Samsungの2006年1Q動向	41
6.2.	欧州	21	14	LGの2006年1Q動向	44
6.3.	北米	21	15	6社以外の2006年1Q動向	47
6.4.	中南米	21	15.1.	欧州メーカー	47
7	主要ネットワークメーカーのモバイルインフラ部門売り上げ推移	22	15.2.	日本メーカー	47
8	端末需要動向推移	23	16	端末各社の出荷計画	49
8.1.	2006年1Q(1-3月)需要動向	23	17	製品在庫状況	50
8.2.	地域別端末最新状況	25			

2006年1Qの世界の携帯電話市場概況

加入者数推移

1-3月期の世界の新規加入件数は前期4Qを下回ったものの、1億件の大台を確保した。地域別では2005年を通して新規加入を押し上げた東欧、中南米が落ち込み、特にロシア、ウクライナ、ブラジルは前期の新規加入に対して半減の新規加入に留まった。一方1Qに新規加入を下支えしたのはアジア地域で、インド、インドネシア、パキスタンが前期4Qの新規加入規模を上回った。インドの3月の新規加入はGSM、CDMA合わせて500万件を突破、2Qでは中国を抜いて新規加入でトップに躍り出る可能性も出てきた。

中国は春節の需要期に当たるため新規加入を伸ばし、1,600万件と過去最高の新規加入規模を達成した。新規加入の大半はGSMで、CDMAは低迷した。中国PHSの新規加入件数は1月に単月で100万件を割り込んだものの2月、3月は上昇に転じている。

方式別ではWCDMAが欧州で前期新規加入水準を割り込み、日本ではVodafoneが前期を上回ったのに

対して、NTT ドコモは前期並みの新規加入規模になった。ワールドワイドの WCDMA の新規加入は前期 4Q に対して 26%程度落ち込んだ。EVDO は米国で普及が進み、日韓を中心としたワールドワイドでは前期 4Q を上回った。日韓は 1x から EVDO の切り替えが進み、1Q で初めて 1x の累積加入が前年末を下回った。

端末需要

新規加入は落ち込んだが 1Q の端末需要は堅調に推移した。買い替え率も前期水準を 3 ポイント上昇した。端末メーカーの寡占度は高まり上位 6 社で 84%に達した。6 社の中でも明暗を分け、LG、Benq は端末部門で赤字を記録、特に Benq は Siemens 統合の模索が続いている。

一方 1Q でシェアを挙げたのは Motorola で、同社は 1-3 月期について四半期ベースで最大の販売額、販売台数、販売収益と株主報告した。RAZR、SLVR、PEBL のミッドエンドと C シリーズのローエンドの販売が好調で、iDEN を含めた端末市場シェアは 20%を越えた。ただ端末の平均販売金額(ASP)は前期を大きく下回っており、プロダクトミックスの変化のほか、牽引している RAZR の値下げが取り沙汰されている。端末部門が好調の反面、全社ベースでは業績は悪化しており、全社の営業利益は前期比半減まで落ち込んだ。

Nokia は 1Q で端末シェアを下げたが、安定した業績を確保した。分離した Multimedia 部門の収益率は Mobile Phone 並みに上昇し、Enterprise 部門の赤字幅も前期に比べて改善した。販売地域別では弱点であった北米向けが前期に比べ好調を持続し、前年同期に対する端末出荷は倍増の規模になった。Nokia は北米での成功をオペレータ向けのカスタマイズに成功したと報告している。Nokia は 2Q で注目の N シリーズを 4 月以降販売する予定で、さらに下位メーカーとの引き離しを図る考えである。

各社が ASP を下げる中、Sony Ericsson のみが前期水準を上回った。欧州におけるウオークマンシリーズ、NTT ドコモ向け FOMA、au 向け WIN などミッドエンドが好調に推移したことが ASP 上昇の背景になっている。

Samsung は収益率で 10%を回復したものの、ASP は国内、輸出とも前期を下回った。LG、Curitel も含めて Won 高も一部影響がでているものとみられる。Samsung は DMB 端末、DVB-H などテレビ搭載端末、薄型タイプなど個性的な端末をリリース、Nokia、Motorola とは異なった製品戦略を展開している。